

「隅田川」を歩く

廣田 幸稔

小学校の音楽の時間に習った滝廉太郎「花」、春のうららの、で始まるメロディが記憶に残っています。現代の隅田川は東京の東側を流れる荒川の分流として、北区から足立区、台東・中央・墨田・江東区と流れて東京湾にそそぐ大きな川です。まずは東京駅を出発し、河口に一番近い勝鬨橋に行きました。川面には、能「隅田川」の詞章にも出てくるみやこ鳥、ユリカモメが何羽も泳いでいます。「伊勢物語」で在原業平が歌に詠んだみやこ鳥、作者元雅が作劇をイメージした隅田川は、当時どんな風景だったのでしょうか。

東京の河川に関する本などによると、徳川家康が江戸城を築城する前と現在とでは、海岸線は大きく異なりました。隅田川の名称も入間川、浅草川などと変わり、また、一本の川でも流れる場所によって千住川、宮戸川、大川との呼び名があり、さらにその川も、治水工事がなされる以前は、水嵩によって川筋も大きく蛇行して定まらなかったようです。元は利根川水系ですが、昭和に入ってから治水工事で荒川水系に流れが変わるなど、河川の歴史は素人にはなかなか理解できないということだけはよくわかりました。

そこで、「隅田川」に関連する史跡散策として、ひとまず「古隅田川」を目指しました。東武野田線春日部駅より大宮

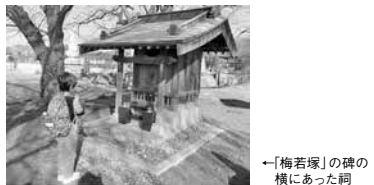
方向に一駅いった八木崎駅で下車し、「元荒川」に向かって国道2号線を二十分ほど歩いたところ、豊春小学校の正門横の水路に「古隅田川」の標識と、「業平橋」がありました。川の周囲を歩いても特に大きな流れになるようでもなく、そのまま住宅街の道路に暗渠として見えなくなってしまう。みやこ鳥が行きかい、渡し舟が往来するイメージとは随分違いますが、堤防の一部が古隅田公園として残されており、わずかに大河の面影がありました。東武野田線北側の農道を三十分ほど歩くと真言宗満蔵寺が見えてきます。山門前には梅若塚の碑と祠、宝生流十七代宗家お手植えの柳があります。都北白川に住む吉田



↑住宅地の間を流れる「古隅田川」
古隅田川堤防跡にある古隅田公園



↑真言宗満蔵寺(埼玉県春日部市)
満蔵寺山門前の「梅若塚」。宝生流十七代宗家手植の柳、
同流今井康男氏手植の柳がある。



←「梅若塚」の碑の
横にあった祠

少将の子・梅若丸は人商人・信夫藤太にかどわかされて隅田川までたどり着いたものの力尽き、哀れに思った里人が供養をするという、能「隅田川」とおりの物語も残っています。満蔵寺のある春日部は奥州街道の粕壁宿、東京を流れる隅田川にも同じく奥州街道の千住宿があり、江戸から奥州に向かう街道沿い、隅田川沿いとしては一致した位置であるともいえます。

さて、現在の隅田川は、千住、鐘淵から両国、浅草を経て東京湾までの川筋の名称です。梅若塚が残る東京都墨田区の天台宗梅柳山隅田院木母寺を訪れました。七年前の小会での演能に続き二度目です。運よくご住職様とも再会でき、ご好意で梅若堂の中でお参りをさせていただくこともできました。木母寺は四代將軍徳川家綱の時代「梅若権現御縁起」に現されるだけでなく、江戸名所図会にも描かれ、さらには文楽、浄瑠璃などの作品を生む、江戸の隅田川物文化の発祥の地といえるかもしれません。

梅若丸の命日（新暦4月15日）には今も盛大に梅若忌が行われています。近くには隅田川の水神を祀った隅田川神社、隅田の渡し、梅若丸の母が葬られたという妙亀塚などがあります。また、業平の歌から命名された言問橋、桜餅で有名な長命寺も近く、桜の時期は多くの人で賑わう界隈です。木母寺へは東武伊勢崎線鐘ヶ淵駅下車徒歩十分。

平成二十八年五月吉日



↑隅田川河口。
ユリカモメ。



↑木母寺(東京都墨田区)
←木母寺住職河部氏と
子方を務める明幸。
梅若堂の前で。



↑隅田川の水神をまつる隅田川神社。
近くに「隅田の渡し」の表示板があった。